「その日、世界でもっとも何もせず、世界で
もっとも多くの人を救った女」

登場人物

佐々木ひるね（３０）	スマホショップ店員。女性。
中年サラリーマン（４４）	サラリーマン
老婆（８０）	スマホショップの客
スマホショップの男性客（３５）	スマホショップの客
コンビニの外国人店員（２４）	東南アジア系
爆弾男（２５）	犬カフェの客
犬カフェの女性店員（２９）	犬カフェの店員
スーパーの男性客１（３５）	スーパーマーケットの客
スーパーの男性客２（３５）	スーパーマーケットの客
筋肉男（３９）	フィットネスクラブの客
将軍	宇宙人兵士を率いる将軍
ロングコートの女（３０）	謎めいた女
	※ひるねと一人二役
店長	スマホショップの店長
スマホショップの女性店員	ひるねの同僚
コンビニの日本人店員	コンビニの店員
強盗男	コンビニ強盗

○アパート・外観（朝）

数階建て程度の大きくはないが小綺麗なアパート。

○同・ひるねの部屋（朝）

ベッドサイドに置かれたスマホのアラームが鳴り、画面に8:00の文字が出る。ベッドから佐々木ひるね（３０）の手が伸びてきて、しばしスマホの周囲を探ったのち、スマホを掴んでアラームをオフにする。

ひるね、眠そうに上半身を起こして、あくびをする。

○同・洗面所（朝）

パジャマのまま歯を磨くひるね。

○同・台所（朝）

熱したフライパンのフチで卵を割ってフライパンの中に落とすひるね。

コーヒーメーカーのスイッチを入れる。

○同・ベランダ（朝）

小さな鉢植えにじょうろで水をやる
ひるね。鉢植えのひとつは、まだつぼ
みの状態の花。
台所からトースターがトーストを吐き
出すチンッという音がする。

○同・台所（朝）

ひるね、皿に目玉焼きを盛り、ウィン
ナーを盛り、トーストを盛る。
コーヒーをカップにそそぐ。

○同・居間（朝）

オフィスカジュアルに着替えたひるね
が、ぼんやりと朝食を食べている。
食べながらスマホを見ると、8:45。

○坂道（朝）

自転車を立ちこぎして坂道をのぼっているひるね。

○電車の駅（朝）

満員電車が停車している。発車ベルが鳴る中、ひるねはダッシュしてきて無理やり満員電車に乗り込む。

やや遅れて反対方向から同じドアに走ってきた中年サラリーマン（４４）はぎゅうぎゅうの満員電車に乗り込めず、おろおろしているうちに電車のドアが閉まってしまう。

○スマホショップ

ひるね、スマホ新規契約の接客中。

ひるね「こちらのサービスは初回３ヶ月間は無料となりますので、お使いいただいて不要であればのちほど利用停止にしていただいて構いません。３ヶ月以内であれば料金は一切かかりませんので」

○ファストフード店

休憩中。ボーッと宙を見つめながらハンバーガーを食べているひるね。

○スマホショップ

ひるね、スマホを持参した老婆（８０）の接客中。

老婆「それで、メールアドレスっていうのはどこにあるの？」

ひるね「メールアドレスはあの、キャリアメールの場合は」

老婆「ううん、メールアドレス」

ひるね「あ、メールアドレスは複数ありまして」

老婆「ええ？　ひとつしか貰ってないよ？」

○スマホショップ・外（夜）

ひるね、店内の同僚に声をかけながら外に出てくる。

ひるね「お疲れ様でーす」

○犬カフェ（夜）

店の大型犬のココアが、リボン結びにした巾着袋のヒモを引っ張り、巾着袋を開けようとしている。それはひるねからのココアへのプレゼント、ひるねは座ってココアが巾着袋を開けるのを眺めている。

ひるね「今日は何が入ってるかなー？」

ココア、巾着袋の中からボールのオモチャを取り出して、ひるねに見せる。

ひるね「わぁ、ボールだぁ」

○スーパーマーケット（夜）

見切り品コーナーに来ているひるね。見切り品のケーキをカゴに入れ、その場を去る。

その次にスーパーの男性客１（３５）がやってくるが、見切り品を一瞥して、

何も取らずに去る。

○フィットネスクラブ（夜）

スポーツウェアに着替えたひるねが窓際に並ぶランニングマシーンの一つで走っている。

隣のランニングマシーンではランニングシャツの筋肉男（３０）が走っている。

窓の外にはひとけのない夜の町の風景が広がっている。

○アパート・外（夜）

ひるねが帰ってきてエントランスに入っていく。

○同・ひるねの部屋（夜）

パジャマに着替えたひるね、テレビのお笑い番組を見ながら、ケーキをつまみにビールを飲んでいる。時折つまら

なそうに笑う。

×　　×　　×

照明の落ちた暗い室内。ひるねはベッドに入ってスマホを見ている。

ひるね、あくび。スマホのアラームを8:00にセットして、スマホをベッドサイドに置くと、眠りに就く。

カメラ、パンしてベランダの向こうに広がる静かな夜空を捉える。

○同・ひるねの部屋（朝）

ベッドサイドに置かれたスマホのアラームが鳴り、画面に8:00の文字が出る。

ベッドからひるねの手が伸びてきて、しばしスマホの周囲を探ったのち、スマホを掴んでアラームをオフにする。

ひるね、眠そうに上半身を起こして、あくびをする。

○同・洗面所（朝）

パジャマのまま歯を磨くひるね。

○同・台所（朝）

熱したフライパンのフチで卵を割って
フライパンの中に落とすひるね。
コーヒーメーカーのスイッチを入れる。

○同・ベランダ（朝）

小さな鉢植えにじょうろで水をやる
ひるね。
台所からトースターがトーストを吐き
出すチンッという音がする。

○同・台所（朝）

ひるね、皿に目玉焼きを盛り、ウィン
ナーを盛り、トーストを盛る。
コーヒーをカップにそそぐ。

○同・居間（朝）

オフィスカジュアルに着替えたひるね

が、ぼんやりと朝食を食べている。
何気なくコーヒーを飲むと、口からこぼれてしまい、服にコーヒーがつく。
ひるね「ああ……やっちゃった」

○坂道（朝）
別のシャツに着替えたひるねが、自転車を前日よりも激しく立ちこぎして坂道をのぼっている。

○電車の駅（朝）
満員電車が停車している。発車ベルが鳴る中、ひるねはダッシュしてきて無理やり満員電車に乗り込む。
やや遅れて反対方向から同じドアに走ってきた中年サラリーマンはぎゅうぎゅうの満員電車に乗り込めず、おろおろしているうちに電車のドアが閉まってしまう。

○スマホショップ

ひるね、スマホ新規契約の接客中。

ひるね「こちらのサービスは初回３ヶ月間は無料となりますので、お使いいただいて不要であれば」

客「いらない」

ひるね「３ヶ月間は無料となりますので」

客「だからいらないって」

○ファストフード店

休憩中。ボーッと宙を見つめながらハンバーガーを食べているひるね。

○スマホショップ

ひるね、スマホを持参した老婆の接客中。

老婆「ほら画面が変になっちゃってるじゃない」

ひるね「あ、そうしましたら設定を開いていただきまして」

老婆「設定？」
ひるね「あ、メニュー画面にございますので」
老婆「設定なんてあたし何もしてないよ？」

○スマホショップ・外（夜）
ひるね、店内の同僚に声をかけながら外に出てくる。
ひるね「お疲れ様でーす」

○犬カフェ（夜）
店の大型犬のココアが、リボン結びにした巾着袋のヒモを引っ張り、巾着袋を開けようとしている。
ひるねは少し疲れた様子で、座ってココアが巾着袋を開けるのを眺めている。
ひるね「今日は何が入ってるかなー？」
ココア、巾着袋の中から骨のオモチャを取り出して、ひるねに見せる。
ひるね「わぁ、ホネホネだぁ」

○スーパーマーケット（夜）

見切り品コーナーに来ているひるね。見切り品にはケーキやお菓子などのめぼしいものがなく、ひるねは仕方なさそうにその中のフランスパンをカゴに入れて、その場を去る。

その次にスーパーの男性客1がやってくるが、見切り品を一瞥して、何も取らずに去る。

○フィットネスクラブ（夜）

スポーツウェアに着替えたひるねが窓際に並ぶランニングマシーンの一つで走っている。

隣のランニングマシーンでは筋肉男が走っている。

○アパート・外（夜）

ひるねが帰ってきてエントランスに入っていく。

○同・ひるねの部屋（夜）

パジャマに着替えたひるね、テレビのお笑い番組を見ながらフランスパンをつまみにビールを飲んでいる。時折つまらなそうに笑う。

部屋の隅にはコーヒーの染みのついたシャツがそのまま置かれている。

× × ×

照明の落ちた暗い室内。ひるねはベッドに入ってスマホを見ている。

ひるね、あくび。スマホのアラームを8:00にセットして、スマホをベッドサイドに置くと、眠りに就く。

カメラ、パンしてベランダの向こうに広がる静かな夜空を捉える。

○同・ひるねの部屋（朝）

ベッドサイドに置かれたスマホのアラ

ームが鳴り、画面に8:00の文字が出る。
ベッドからひるねの手が伸びてきて、
しばしスマホの周囲を探ったのち、ス
マホを掴んでアラームをオフにする。
ひるね、眠そうに上半身を起こして、
あくびをする。

○同・洗面所（朝）
パジャマのまま歯を磨くひるね。

○同・台所（朝）
熱したフライパン。そのフチで卵の殻
を割ろうとして、ひるねは手を滑らせ、
卵を床に落としてしまう。
落ちた卵をじっと眺めるひるね。

○同・ベランダ（朝）
小さな鉢植えにじょうろで水をやる
ひるね。
台所からトースターがトーストを吐き

出すチンッという音がする。

○同・台所（朝）

ひるね、シリアルを盛った深皿に牛乳をかけ、平皿にトーストを盛る。コーヒーをカップにそそぐ。

○同・居間（朝）

オフィスカジュアルに着替えたひるねが、ぼんやりと朝食を食べている。食べながらスマホを見ると、8:45。

○坂道（朝）

自転車を立ちこぎして坂道をのぼっているひるね。

○電車の駅（朝）

満員電車が停車している。発車ベルが鳴る中、ひるねはダッシュしてきて無理やり満員電車に乗り込む。

やや遅れて反対方向から同じドアに
走ってきた中年サラリーマンはぎゅう
ぎゅうの満員電車に乗り込めず、おろ
おろしているうちに電車のドアが閉ま
ってしまう。

○スマホショップ
ひるね、スマホ新規契約の接客中。
ひるね「こちらのサービスは加入必須ですの
でご了承下さい」

○ファストフード店
休憩中。ボーッと宙を見つめながらハ
ンバーガーを食べているひるね。

○スマホショップ
ひるね、スマホを持参した老婆の接客
中。
老婆「お年寄りに親切じゃないないと思うの
よ、スマホって」

ひるね「はぁ、そうかもしれないですねぇ」
老婆「そうでしょう？　毎日毎日こうやって
ここに来て、あたしもうなんだか疲れちゃ
った」
ひるね「申し訳ございません」
老婆「謝らなくたっていいのよ」

○スマホショップ・外（夜）
ひるね、店内の同僚に声をかけながら
外に出てくる。
ひるね「お疲れ様でーす」

○犬カフェ（夜）
店の大型犬のココアが、リボン結びに
した巾着袋のヒモを引っ張り、巾着袋
を開けようとしている。
ひるねは座ってココアが巾着袋を開け
るのを疲れた表情で眺めている。
ひるね「今日は何が入ってるかなー？」
ココア、巾着袋の中から百円ショップ

で買ったような粗雑なぬいぐるみを取り出して、ひるねに見せる。

ひるね「わぁ、なんか変なやつだぁ」

○スーパーマーケット（夜）

見切り品コーナーに来ているひるね。そこにはふりかけとしょうゆしか置かれていない。

ひるね、今日は何もカゴに入れないでその場を去る。

次にやってきたスーパーの男性客1も見切り品を一瞥して、何も取らずに去る。

○フィットネスクラブ（夜）

スポーツウェアに着替えたひるねが窓際に並ぶランニングマシーンの一つで走っている。

隣のランニングマシーンでは筋肉男が走っている。

ひるね、息を切らしてマシーンから降り、更衣室の方へ向かっていく。

○アパート・外（夜）

ひるねが帰ってきてエントランスに入っていく。

○同・ひるねの部屋（夜）

パジャマに着替えたひるね、冷蔵庫を開けてビールを取り出すと、空の卵パックが目に入る。悔しそうな表情を浮かべて独り言つ。

ひるね「あぁもう、買い忘れた……」

部屋の隅にはまだコーヒーの染みのついたパジャマが置かれている。

× × ×

照明の落ちた暗い室内。ひるねはベッドに入ってスマホを見ている。

ひるね、あくび。スマホのアラームを8:00にセットして、スマホをベッドサ

イドに置くと、眠りに就く。
カメラ、パンしてベランダの向こうに
広がる静かな夜空を捉える。

○同・ひるねの部屋（朝）
ベッドサイドに置かれたスマホのアラ
ームが鳴り、画面に8:00の文字が出る。
ベッドからひるねの手が伸びてきて、
しばしスマホの周囲を探ったのち、ス
マホを掴んでアラームをオフにする。
ひるね、眠そうに上半身を起こして、
あくびをする。

○同・洗面所（朝）
パジャマのまま歯を磨くひるね。
と、その手を止めて、鏡の中の自分の
顔をじっと見つめる。

○同・ひるねの部屋（朝）
パジャマのまま椅子に座ってボーッと

しているひるね。
テーブルの上に食事はない。

○同・ベランダ（朝）
水やりのされていない植木鉢たち。

○同・ひるねの部屋（朝）
ベッドに入ってスマホで電話している
ひるね。
ひるね「すいません、なんか体調悪くて……
ちょっと午後からの出勤も厳しいです……
はい、すいません……失礼します」
ひるね、電話を切るとスマホをベッド
サイドに置いて、ベッドに横たわった
まま天井を見上げる。その眼差しの先
に気になるようなものは何も無い。
時計のチクタク音が静かな室内に響き
渡る。

○同・ひるねの部屋

何をするでもなく、眠ることもなく、
ただベッドに入ってボーッとしている
ひるね。
外からは子供たちの遊ぶ声が聞こえて
くる。

○同・ひるねの部屋（夕）
ベッドサイドに腰掛けてボーッとして
いるひるね。
外からは防災行政無線の「夕焼け小焼
け」のメロディが聞こえてくる。

○同・ひるねの部屋（夜）
明かりのついていない暗い室内。
ベッドに横たわっていたひるねはゆっ
くり半身を起こして、室内を右から左
まで見渡す。
室内に目を引くものは何もない。
リモコンでテレビをつけるひるね。
ニュース番組がやっている。

ニュースキャスター「店内に爆発物のようなものを持った男がいると飲食店従業員から１１０番通報があり、駆けつけた警官によって爆発物取締罰則違反の疑いで男が逮捕されました。調べに対し、男は「知人から預かったもので中身は知らなかった」と供述しているとのことです。警察は爆発物の成分解析を進めると共に、入手経路についても調べを進めています」

ひるね、立ち上がって部屋の電気をつけると、冷蔵庫に向かう。冷蔵庫を開けて中にある缶ビールを取ろうとするが、そこで手を止め、一度取りかけたビールを元の場所へ戻す。

×　　×　　×

テレビでお笑い番組を見ているひるね。いつもと違って少しも笑わない。

スマホを手に取って時間を見るひるね。

２１時４６分。

ひるね、ため息を吐く。

○同・ベランダ（夜）

ひるね、部屋から出てきて、欄干に寄りかかって夜の町を眺める。これといって変わったところのない平凡な風景。ひるねがしばらくそうしていると、夜空の一点が一瞬強くきらめく。

それに気付いたひるねは光ったところを見上げるが、それからは夜空の一点がきらめくことはなく、普段通りの景色になる。

○同・ひるねの部屋（夜）

照明の落ちた暗い室内。ひるねはベッドに入ってスマホを見ている。

ひるね、あくび。スマホをベッドサイドに置くと、眠りに就く。

カメラ、まだ電源がオフになっていないスマホの待ち受け画面にパンする。

そこには現在時刻が表示されている。

２３時５９分。それが０時になり……
すると、時計の時間は戻っていって、
徐々にその速度を上げつつ、やがて朝
の８時になる。
スマホのアラームが作動する。その音
はひるねのスマホアラームとは別のも
の。

○安アパート・中年サラリーマンの部屋（朝）
男の手が画面外から伸びてきてスマホ
のアラームを止める。う～ん、と不快
そうな男のうめき声。寝ぼけた調子で、
中年サラリーマンの声「まだ眠らせて……」
手は布団の中に引っ込む。布団にくる
まって眠っているのはひるねが毎日駅
ですれ違う中年サラリーマン。
ぐーぐーとイビキをかき始める中年サ
ラリーマンは、しばらくして、布団か
ら飛び起きる。
中年サラリーマン「またやっちゃった！」

○線路沿いの道路（朝）

口にパンをくわえた中年サラリーマンが、ジャケットを着ながら道路を走っている。

○電車の駅（朝）

発車ベルが鳴る中、中年サラリーマンが階段を駆け上がって、停車した満員電車に向かっていく。

いつもならそこでひるねに邪魔されるが、今日はひるねがいないため、サラリーマンはギリギリで駆け込み乗車に成功する。

安堵したように深くため息をつく中年サラリーマン。

○別の電車の駅・外（朝）

中年サラリーマンがゆっくりと歩いて駅から出てくる。

○小さな川にかかる橋（朝）

ロングコートの女（３０）が橋の中腹に立って、両手をポケットに突っ込み川を眺めていると、そこに中年サラリーマンが通りかかって、歩きながら何気なく川を眺める。

腕時計を見る中年サラリーマン。

中年サラリーマン「まだ時間あるか……」

中年サラリーマン、川沿いの遊歩道に入って、ベンチに座り、きれいな川の風景を眺める。

○川沿いの団地の一室・ベランダ（朝）

幼児がベランダの欄干によじのぼろうとしている。室内から母親の声。

母親「マー君あぶないよ、やめて」

○川沿いの遊歩道（朝）

体操のように腕を大きく伸ばして両足

を広げる中年サラリーマン。

中年サラリーマン「うーん」

○川沿いの団地の一室・ベランダ（朝）

幼児、バランスを崩して、ベランダの外に落下する。駆け寄る母親。

母親「マー君！」

○川沿いの遊歩道（朝）

3階ほどの高さから落下してきた幼児が、ちょうど両手両足を広げた中年サラリーマンの腹に落ちてくる。

中年サラリーマン「ふぐっ！」

団地の落ちてきたベランダから母親が顔を覗かせる。

母親「マー君！　大丈夫！？」

幼児、大きな声で泣き出すが、身体は中年サラリーマンがクッションになって無事。

母親「ああよかった！　今行くからね！」

母親、顔を引っ込める。
中年サラリーマン、幼児激突の痛みで
その場から動けず、うめきながら、
中年サラリーマン「だ、大丈夫じゃない……」

○スマホショップ
老婆が店長と口論している。そのせいで順番が進まず店内には順番待ちの客が何人もいる。
老婆「いつもの女の人はいないの？　いつもだったらちゃんとやってもらってるよ？」
店長「申し訳ありません、本日欠勤しておりまして」
老婆「欠勤はいいのよ。人のせいにしないで？　あなたがちゃんとやってくれればいい話なんだから。そうでしょ？」
店長「お客様の個人情報となりますので、私の方でパスワードを設定するということは……」
老婆「私の個人情報を私が自由にできないわ

け？　おかしいじゃないの。あなた言ってることとさっきからおかしいよ？　ねぇいつもの人は来ないの？」

順番待ちしているスマホショップの男性客（３５）が老婆の背中を眺めながら、苛立たしげに貧乏揺すりをしている。

やがて立ち上がり、別の客の接客中の女性店員に近づいていく。

スマホショップの男性客「すいません、もう３０分も待ってるんですけど、まだ時間かかります？」

女性店員、チラリと老婆を見て、

スマホショップの女性店員「申し訳ありません、順番通りにお呼び致しますので、もうしばらくお待ちください」

スマホショップの男性客「あ、じゃあいいです」

スマホショップの男性客、店の外へ出て行く。

○スマホショップの前

出てきたスマホショップの男性客がタバコを吸おうとポケットからタバコを取り出すが、中身は空。

スマホショップの男性客、辺りを見回し、コンビニを発見する。

○コンビニ

スマホショップの男性客が入ってきて、外国人店員の立っているレジに向かう。

コンビニの外国人店員「いらっしゃいませー」

スマホショップの男性客、タバコ棚に目当ての銘柄を探す。

スマホショップの男性客「あれ、キャメルの普通のって無い？」

コンビニの外国人店員「キャメルの……普通の？」

スマホショップの男性客「あー、たぶん36番かな。メンソールじゃなくて、それの普

通のやつ」

外国人店員、タバコ棚の示された番号のところを見る。その番号のタバコは空になっている。

コンビニの外国人店員「あー、奥にあるかもしれないので、ちょっとお待ちください」

スマホショップの男性客「あはい」

コンビニの外国人店員、小走りに事務所に入っていく。その姿が事務所に消えたところで、店内にフルフェイスヘルメットを被った強盗男が入ってきて、ロングコートの女が会計しているもう片方のレジに割り込むと、コンビニの日本人店員にナイフを突きつける。

強盗男「金を出せ！　早く！　全部！」

呆然とするスマホショップの男性客。

日本人店員は固まって動けない。

強盗男、更にナイフの存在を強調し、

強盗男「早く！　殺すぞ！」

と、強盗男の背後から外国人店員が走

ってきて、強盗男に背後からドロップキック。強盗男はレジに身体を強打し、包丁を落として床に崩れ落ちる。すかさず強盗男に柔道の寝技をかける外国人店員。それをただ眺めている日本人店員とスマホショップの男性客とロングコートの女。他の人々と違い、ロングコートの女はとくに驚いた様子もない。

コンビニの外国人店員「なにしてるの！　誰か早く警察呼んで！」

○ボロアパート・外観（夜）
２階建ての木造アパート。

○その一室・爆弾男の部屋（夜）
陰気な風貌の爆弾男（２５）がスマホで動画自撮りをしている。
デスクの上にはリード線や火薬や様々な工具が乱雑に置かれている。

爆弾男「だからこれは革命じゃない。革命の狼煙だ。君たちがこの動画を見ている時、おそらく俺はもうこの世にはいない。そして世間は俺を忘れる。でも君たちは忘れない。君たちが次の爆弾だ。いいか。この腐った国の政治家。医者。経済……経済界」

爆弾男、納得がいかないように首をかしげ、動画撮影をストップすると、咳払いをして襟を正す。再度録画開始。

爆弾男「だからこれは革命じゃない。革命の狼煙だ。君たちがこの動画を見ている時、おそらく俺はもう」

○駅前広場（夜）

無名のアイドルグループが広場のステージで路上ライブをやっている。

その最前列は熱心なファンが陣取っていてオタ芸を披露しているが、ほかの見物客はあまりおらず、多くの人はアイドルに目もくれず通り過ぎていく。

爆弾男はサングラスをかけ、紙袋を手に、腕組みして駅の壁によりかかってアイドルを眺めている。

爆弾男「あばよ、ファック・ザ・ワールド」

アイドルのステージに向かって歩き出す爆弾男。歩きながら紙袋からリボンを結んだ小さいプレゼント箱を取り出し、紙袋を捨てる。

と、爆弾男の前を自転車に乗った警官が通り過ぎる。その瞬間、爆弾男は歩く向きを変えて商店街の方に向かう。

○犬カフェ（夜）

爆弾男が入ってくる。店にはロングコートの女が来店していて、コーヒーを飲みながら何か考え込んでいる。

犬カフェの女性店員「（来て）いらっしゃいませー。お一人様ですかー？」

爆弾男「あ、はい」

犬カフェの女性店員「当店のご利用は初めて

ですかー？」

爆弾男「えーと、あー、知ってます、大丈夫です。（席指さし）あそこいいですか？」

犬カフェの女性店員（２９）、少し面食らった様子。

犬カフェの女性店員「あ、はい、どうぞ」

爆弾男、いつもはひるねが座っている席に座ると、傍らにプレゼント箱を置いて、手で顔を覆う。

するとココアがやってきて、プレゼント箱のリボンを解き、中身を取り出す。中身は下手な作りの爆弾のようなもので、ココアはそれをくわえて犬カフェの女性店員に持っていく。彼女は屈んで爆弾のようなものをココアから取り上げる。

犬カフェの女性店員「こらこら、ダメだよ！えーなにこれ。どこから持ってきた？」

爆弾男、顔を上げるとそれに気付き、犬カフェの女性店員を見つめる。

爆弾男「あ」

犬カフェの女性店員も爆弾男を見る。

○スーパーマーケット（夜）

見切り品コーナーにスーパーの男性客1がやってくる。

スーパーの男性客1「おっ」

見切り品のケーキに手を伸ばすスーパーの男性客1。と、同時に手を伸ばしてきたスーパーの男性客2（35）の手と重なる。二人、同時に手を引く。

スーパーの男性客1「あ、すいません」

スーパーの男性客2「あいえいえ、どうぞ」

スーパーの男性客1「いいですよ、どうぞ」

スーパーの男性客2「え、いいんですか？」

スーパーの男性客1「どうぞどうぞ、はい」

スーパーの男性客2「じゃ、すいません」

スーパーの男性客1「いえいえいえ」

スーパーの男性客2，ケーキをカゴに入れる。それから二人は反対方向に

歩き出すが、スーパーの客１、立ち止まって振り返る。

スーパーの男性客１「……雅也？」

それを聞いてスーパーの男性客２も立ち止まり、振り返る。

スーパーの男性客２「克彦？」

スーパーの男性客１「どうして、そんな……あの時に死んだんじゃなかったのか？」

スーパーの男性客２「米同時多発テロのことか？　いや、死んでなどいないさ。あの時に俺はＣＩＡの仕事をしていて、俺も過激派の標的になる可能性があるからと死亡を装いしばらくのあいだ姿を消すよう命令されたんだ。すまん……。いや、だが、お前こそ東日本大震災の時に津波に流されて死んだんじゃなかったのか？」

スーパーの男性客１「あぁ、津波に流されたのは事実だ……だが運良くロシアの漁船に拾われたんだ。しかし津波のショックからか記憶は失われていた……長い間忘れてい

たんだ、お前のことも、自分の名前さえも。
俺が記憶を取り戻してこの国に戻ったのは
ごく最近のことだ。そこでまさかお前と再
会できるなんて……」

スーパーの男性客２「克彦……」

スーパーの男性客１「雅也……」

スーパーの男性客２「克彦……」

スーパーの男性客１「雅也！」

二人、感極まって駆け寄り、抱き合う。
その一部始終を見ていたスーパーの他
の客たちが、おもむろに拍手をし始め
て、やがて拍手喝采になる。
ロングコートの女、その光景を眺めな
がら、見切り品のパンをカゴに入れる。

○フィットネスクラブ（夜）

筋肉男がいつものランニングマシーン
に乗って走り出す。
しばらくすると、いつもはひるねが乗
っている隣のランニングマシーンに、

タンクトップ姿の巨乳美女がやってきて、走り出す。
筋肉男、チラリとそちらを見ると、巨乳美女の胸が大きく揺れているのが目に入り、慌てて視線を正面に戻す。
それから視線をゆっくりとずらして、巨乳美女に悟られないよう、窓に映る揺れる胸を凝視する。
ちょうど揺れる胸が反射している窓の向こうに見える歩道を、ロングコートの女が歩いている。
歩きながら咳き込んでいる彼女。咳は益々激しくなっていくようで、やがてロングコートの女は咳き込みながら立ち止まると、その場に倒れ込む。
窓越しにそれが見えていた筋肉男は、ロングコートの女の異常に気付く。

○街路（夜）

筋肉男、フィットネスクラブの外に出

てきて、道路を渡ってロングコートの
女に駆け寄る。
筋肉男「大丈夫ですかー！　そこの人――！
救急車呼びますかー！」
筋肉男がロングコートの女のすぐそば
まで来ると、ロングコートの女は何か
を口に入れて、すっくと立ち上がる。
筋肉男「だ、大丈夫ですか？」
筋肉男を見もせず、無言で立ち去ろう
とするロングコートの女。筋肉男はど
うしていいかわからないという顔でそ
の姿を眺める。
と、ロングコートの女は立ち止まる。
振り返らずに、
ロングコートの女「男」
筋肉男「は、はい？」
ロングコートの女「なぜ助けようとした？」
筋肉男「え、なぜ？　なぜって言われても
……なんかすいません」
ロングコートの女、鼻を鳴らして立ち

去っていく。

ロングコートの女「バカだよ君たちは。救いがたいほどにな」

唖然とする筋肉男。

○カラオケ店・外（夜）

ロングコートの女が中に入っていく。

○同・個室（夜）

ロングコートの女が座ってテレビモニターを眺めている。

彼女はおもむろに奇妙な形をしたリモコンのような物体を取り出すと、それをモニターに向け、スイッチを押す。

すると、モニターに映っている映像が乱れ、やがてそこに半魚人のような人型宇宙人の将軍の顔が、リモート会議のように映し出される。将軍の背景には広々とした宇宙船の操縦室が映っており、船内で働く宇宙人が何人も見え

る。
ロングコートの女、リモコンのようなものをテーブルに置き、その先端を自分に向ける。
ゴホゴホと咳き込み、咳払いするロングコートの女。
将軍とロングコートの女は宇宙人語で話し始める。
将軍「やはり地球の大気は毒か」
ロングコートの女「なに、慣れたものです。将軍の代わりに毒見をするのが私の仕事ですからね」
将軍「地球で覚えたジョークかね？　調査員００８号」
ロングコートの女「かもしれません。状況を」
将軍「我々は今、地球の目前に兵力を結集させている。知っての通り、地球の支配種族であるニンゲンは非常に獰猛な性格だ。そのニンゲンが本格的に宇宙進出を始めれば、我々との衝突は避けられないだろう。むろ

ん、技術力では我々がニンゲンを圧倒している。しかし、用心に越したことはない。それをニンゲン語でなんと言うかね、調査員００８号」

ロングコートの女、少し考える。

ロングコートの女「（英語で）Better safe than sorry」

将軍「うむ。なにしろ獰猛な種族だ、いざ衝突となった場合にはどれほどの被害が生じるかわからん。だからこそ、人間がいまだ太陽系を出ていない今このとき、先制攻撃を仕掛け、ニンゲンを滅亡させる必要がある。君には改めて説明するまでもないことだろうが」

ロングコートの女「ええ、当然です」

将軍「では、調査員００８号、結論から言ってくれたまえ。もしニンゲンの反撃能力が想定通り我が軍に軽微な損害を与える程度に留まるのであれば、君の報告を聞き次第、全軍を地球に投入する」

○宇宙空間

数百もあろうかという戦闘宇宙船の群れが隊列を組んで地球に向かっている。

○カラオケ店・個室（夜）

将軍「だが、万一にもニンゲンの反撃能力が想定を上回る場合、計画を練り直す必要があるだろう。調査員００８号。地球人の反撃能力は、君の見立てで我々の想定内か？」

ロングコートの女、しばらく将軍を見つめたまま何も言わない。

それから、独り言のように口を開く。

ロングコートの女「（日本語）果報は寝て待て」

将軍、怪訝な表情。

将軍「失礼、今なんと？」

ロングコートの女「ある部族のニンゲンに伝わる諺です。時には、行動するよりも行動しない方が良い結果をもたらすこともある。

そのような意味です」

将軍「話が読めないが」

ロングコートの女「将軍の言うとおり、ニンゲンという知的種族の獰猛さはこの銀河でも類をみないほどです。これを果たして知的種族に分類していいものか、疑問に思えるほどだ。同じ種族に対する連日の殺害行為、環境に対する長年に渡る破壊行為、それが種族全体に知られているにも関わらず、止めるという判断ができないほどニンゲンは救いがたく獰猛なのです。果たしてそんなニンゲンが、自己崩壊することなく生き延びることができるでしょうか？　否。ニンゲンは近い将来、自ら滅亡するでしょう」

　将軍、険しい表情で話を聞いている。

ロングコートの女「どうやら我々はニンゲンという種族を過大評価していたらしい。我々からすれば考えられない愚かなことをニンゲンは平気で行ってしまう。将軍、つまりこういうことです。今我々が行動に出

るのは不合理な判断。ここは兵を引き上げ、ニンゲンが自滅するのを待つべきです。それが我が軍の損失を最小限にする、もっとも合理的な判断でしょう」

ロングコートの女は話し終え、今度は将軍がしばし沈黙する。

将軍「承知した。兵は引き上げ、貴君の報告は私から議会に提出しておこう。そのうえでニンゲンに対する行動を決定する。よいな」

ロングコートの女「はい」

○宇宙空間

地球に迫っていた宇宙船団が、一斉にワープして彼方へと消える。ワープの瞬間、船団は強い光を放つ。

○アパート・ひるねの部屋・ベランダ（夜）

空に光るものを目に留め、ひるねがそちらの方向を見る。

○宇宙船内・操縦室

将軍、ロングコートの女との通信を終えて、室内の他の宇宙人兵士たちに振り返る。

将軍「（宇宙人語）しばらくはお役御免だ。海水浴にでも行くか？」

○カラオケ店・個室（夜）

通信を終えたロングコートの女、ほっとしたような、呆れたような表情を浮かべる。

ロングコートの女「バカだよアンタは。救いがたいほどに」

○同・外（夜）

カラオケ店からロングコートの女が出てきて、少し咳き込みながら夜の町へと消えていく。

○アパート・ひるねの部屋（朝）

ひるねがベッドで眠っている。

スマホのアラームが鳴って、やがて

ひるねは目を覚ます。

ひるねはスマホのアラームを止める、

ゆっくり身を起こし、あくびをする。

しばらくその姿勢を変えず、ボーッと

するひるね。やがて、

ひるね「仕事行くか」

○同・洗面所（朝）

パジャマのまま歯を磨くひるね。

○同・台所（朝）

味噌汁がぐつぐつ煮立っている片手鍋

に切った豆腐と乾燥わかめと厚揚げを

入れるひるね。

コーヒーメーカーのスイッチを入れる。

○同・ベランダ（朝）

小さな鉢植えにじょうろで水をやる
ひるね。以前はつぼみだった鉢植えの
ひとつの花が、咲きかけている。
台所からトースターがトーストを吐き
出すチンッという音がする。

○同・台所（朝）
ひるね、シリアルを盛った深皿に牛乳
をかけ、お椀に味噌汁を盛り、平皿に
トーストを盛る。
コーヒーをカップにそそぐ。

○同・居間（朝）
オフィスカジュアルに着替えたひるね
が、もぐもぐと朝食を食べている。
食べながらスマホを見ると、8:30。

○坂道（朝）
自転車を立ちこぎして坂道をのぼって
いるひるね。

○電車の駅（朝）

満員電車が停車している。発車ベルが鳴る中、ひるねはそれには無理に乗らず、次の電車を待っている。

しばらくするとその隣に松葉杖をついたいつものサラリーマンがやってくる。

二人は並んで、ドアが閉まって発車する電車を見送る。

○スマホショップ

ひるね、スマホショップの男性客を相手に、スマホ新規契約の接客中。

ひるね「こちらのサービスは初回３ヶ月間は無料となりますのでご加入をおすすめいたしますが、もし不要であればご加入いただかなくても大丈夫です！」

スマホショップの男性客「あ、じゃあそうしてください」

○牛丼屋

休憩中。ガツガツと牛丼を食べている

ひるね。

○スマホショップ

ひるね、いつもの老婆の接客中。

老婆「心配したのよ。急にいなくなったって

言うから」

ひるね、笑う。

○スマホショップ・外（夜）

ひるね、店内の同僚に声をかけながら

外に出てくる。

ひるね「お疲れ様でーす！」

○犬カフェ（夜）

いつもの席に座って、ひるねがリュッ

クからココアへのプレゼントの入った

巾着袋を取り出すと、犬カフェの女性

店員が止めに入る。

犬カフェの女性店員「すいませんお客様、
あの、ワンちゃんへのプレゼントは見える
形で、あの、必ず開けてお渡しください」
きょとんとするひるね。
ひるね「あ、はい」

○スーパーマーケット（夜）
見切り品コーナーにスーパーの男性客
1と2が来ている。
スーパーの男性客1「いる？」
スーパーの男性客2「いやいらないよ。昨日
買ったやつまだ残ってるじゃん」
そこにひるねがやってくる。見切り品
のケーキを物欲しそうに眺めるひるね
に、スーパーの男性客1は気付く。
スーパーの男性客1「あ、どうぞどうぞ」
ひるね「あ、すいません」
去って行くスーパーの男性客1と2。
ひるね、ケーキをカゴに入れる。

○フィットネスクラブ（夜）

スポーツウェアに着替えたひるねが窓際に並ぶランニングマシーンの一つで走っている。

隣のランニングマシーンでは筋肉男が走っている。

少し速度を上げるひるね。

すると、筋肉男もそれに負けじと速度を上げる。

○アパート・外（夜）

ひるねが帰ってきてエントランスに入っていく。

○同・ひるねの部屋（夜）

パジャマに着替えたひるね、テレビのお笑い番組を見ながら、ケーキをつまみにビールを飲んでいる。時折楽しそうに笑う。

×　×　×

照明の落ちた暗い室内。ひるねはベッドに入ってスマホを見ている。

ひるね、あくび。スマホのアラームを8:00にセットして、スマホをベッドサイドに置くと、満足そうに眠りに就く。

（了）